

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第138号

-環境・農業・食べ物など情報の交流誌-

2004.07.15 (木) 発行 山崎農業研究所&編集同人

<キーワード>

環境・農業・健康・食べ物などの情報提供、高齢者と若者、農村と都市の  
交流ミニコミ誌。山崎農業研究所&『電子耕』編集同人が編集・発行。

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_index.htm](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_index.htm)

\*\*\*\*\*発行部数 1600 部\*\*\*\*\*

---

□ 目次 □-----

<今週の提言>食と農によるまちづくり 石川秀勇

<読者の声>Ya-san さんから：増山さんから：大山さんから

<旬を食べるー野良からの便り・5> “トウモロコシ” 小泉浩郎

<山崎農業研究所情報>

◇山崎記念農業賞・記念フォーラム(2004年7月3日)講演要旨(速報)

ー国民の森林づくり：その目的と技法を問うー

【その1】国民の森林づくりー現状と課題ー

山本 千秋氏(東京林業研究会代表)

<79歳の意見>戦争をしない平和の声はふだんから 原田 勉

<日本たまご事情>松本楼のオムレツライス 愛鶏園・齋藤富士雄

<編集後記・同人の近況報告>7月1日ー7月14日

---

<今週の提言>食と農によるまちづくり

---

地域の活性化を目指し、行政当局をはじめ関係者が知恵を絞っている。これが、いま全国どこでも見られる状況かと思われる。そこでは、地域の人々が育て残した「地域の遺産」に目が向けられ、それが活用されることで活性化が図られている、という事例報告がよく言われる。その地域遺産とは、<町並み>(歴史遺産)であったり、<雄大な自然景観>(自然遺産)であったり、と様々である。

地域で農業が盛んである場合、それは地域遺産でもある、と言えることがあるかも知れない。都市地域でなされている農業は、概して細々と続けられている状況にあり、農家は肩身の狭い思いもいるのではないかと推察されよう。

当方の在住する野田市（都市地域に区分される）では、エダマメが市町村別出荷量で2002年度に全国1位（1870トン）になった。これまで1位は岐阜市で、野田市は2位となっていたが、それが初めてトップになったということである。

野田市のエダマメ生産が全国上位にあることは、地元では近年よく知られていて、「えだまめの郷」という和菓子が何年か前に誕生した。また、今年1月に市の走らせるようになったコミュニティバスの愛称が「まめバス」とされるなど、愛着感を増してきていた。

そうした折に、作物統計で全国1位の報である。それで、市当局とともに商工会議所などまちづくり協議会の関係者が、この機にとエダマメに因んだいろいろなイベントを、このところ実施に移している。

- 3月 「エダマメ オーナー制度」（市民農園）の募集拡大  
「<食と観光>によるまちづくり」講演会
- 5月 遊休農地を活用しての園芸療法にエダマメづくりスタート
- 6月 エダマメ食味会（宴）
- 7月 親子の食体験 -エダマメ編-

これらの行事が、地域のミニコミ紙や一般紙の県内版に載ったり、一部はNHKのローカル番組でも報道された。

このように、まちづくりに地域の農作物の生産が中核にすえられ、扱われているのはなんとも喜ばしいことである。

石川 秀勇  
山崎農業研究所会員、野田市在住  
y.noken@taiyo-c.co.jp

---

<読者の声>

---

●07/06 Ya-san さんから：

秋田県八森町で「猿追い上げボランティア隊」の募集

私が何年か前に一度参加したことのある、八森町「猿追い上げボランティア

隊」募集のお知らせが届きました。広く知人にも呼びかけてほしいとのことで、貴誌や山崎農業研究所を通じて多くの人に知ってもらいたいと思い投稿しました。

八森町は秋田県にあり、世界遺産に指定された白神山のふもとで、観光の拠点になっています。しかし世界に誇る原生林がありながら、又はあるせいで猿が増え過ぎたのか、それとも、世界遺産に指定されたがために人が山に多く入り込んだからなのか、猿による農作物への被害が深刻なものになり、山奥の畑から次々耕作放棄が増え、そのためにますます猿は人里まで降りてくるようになり、いまや家の中まで入ってくるようになっています。

猿はなかなか狩猟の許可が出ず、やむを得ずボランティアを募集し人海作戦で追い払うことにしたところ、参加者もお猿との知恵比べの鬼ごっこの面白さあり、地元の農家のおばちゃんは喜ばれおいしいお米がもらえたりの特典があり、交流が生まれるなどの副産物があり毎年のように参加する人や住み着いた人もいます。私は都市住民にできる本当の援農だと思います。

私が参加したときは、どのように回るか何時ころから行くのかなど参加者が勝手にやっており、効果があるのかないのか良くわかりませんでした。だんだんその辺も整理されてきているようです。7月1日から9月30日までの期間で募集しています。

詳細はホームページ

<http://www.shirakami.or.jp/~hatimori/>

問い合わせ 八森町産業振興課農業係 Tell 0185-77-2111

Eメール [hatimori@shirakami.or.jp](mailto:hatimori@shirakami.or.jp)

=====  
●07/06 増山博康さんから：環境ケア基金をはじめます

上下水道、ゴミ処理、エネルギーなどのライフラインを、税や公共料金を払って維持する「都市」は、共通の家なのだ。

都市型社会に先行する伝統社会では、自然資源を共同で利用するための社会契約が存在した。都市型社会は、形式は違うが、自然を共同で利用していると言う点では、伝統社会と異ならない。ただ、環境に関わる社会契約が未成熟で

ある。

一方、森や海などは、温暖化や酸性雨の影響を受けるとともに、水や空気を浄化してくれる場でもある。そして、その森や海を守るために地元の人達や市民団体が活動している。

今日的な意味での環境に関わる社会契約は、行政と市民活動を包含した概念でなければならない。そこで環境クラブでは、「環境ケア基金」を創設することにした。

省エネや節水に取り組んだ市民が、節約で得たお金の一部を募金する。そのお金を森や海で活動する人達に提供する仕組みである。募金活動自体も、環境教育的な形で進める。「みんなの環境新聞 ペイトリポート」の企画である。

水道やゴミ、エネルギーなどについて、子供達や市民が調べる。自分が使う水がどこから来て、どこに行くのか、そういうことにいったいどれだけのお金が使われているのか、水道料金は何のために使われているのか、そういうことを市民が調べて新聞にまとめる。そして、環境コストの重要性を認識した上で、節約と募金を呼びかける。そういう企画である。

口座はおって開設する予定。進展があったら、また報告します。

今夏の募金は、白神山地きみまち舎のエコツアーリズム。拠点が焼失してしまったのを再建するのにカンパします。募金第一号は、元十文字町町長の西成辰雄さん。きみまち舎の小坂さんのお父さんと旧制の同期だったそうです。

環境クラブ 増山 博康

<http://www.ecoclub.co.jp>

-----

●07/10 大山勝夫さんから：忘れられない平塚大空襲

私にとって生涯忘れることができない日、7月16日が今年もやってきました。そうです、昭和20年の平塚大空襲のことです。当時、旧制中学の2年、寮生活をしていました。

空襲警報が鳴るとともに、超低空で海岸よりから侵入してきた B29 が投下した照明弾で市内は真昼のような光景でした。私たち寮生は本館貴賓室に集められご真影、38 式銃、重要書類、を分担して持出し、教師、上級生とともに花水川方向に避難したのです。引き続いて襲来する B29 から投下される焼夷弾の束は、ちょうど雨のように「ザー、ザー」と不気味な音を立てながら私たちに襲いかかってきました。

花水川河川敷一帯は避難者であふれ、なかには座り込んで念仏をとこなえる老婆の姿が今でも思い出されます。ところで私自身は集団からはぐれ、教師から命じられた重要書類を頭の上のせ、花水川に入り文字通り死守したのです。

爆撃もおさまった日付けが変わる頃、とぼとぼと学校に帰ってみると、校舎、寮は全焼し呆然と立ちすくんでしまったのです。こちらは着の身着のまま、残ったのは命じられた重要書類の束だけでした。

60 年近く過ぎ去った今、このことをしきりに思い出されるのは、最近のきな臭い政治の動きと無関係ではないでしょう。ちなみに米軍の資料によれば、平塚空襲の全貌は B29 : 132 機、焼夷弾投下量 : 1,173 トン、7 月 16 日 23 時 32 分～17 日 1 時 12 分とある。

大山 勝夫  
東京生命科学学園、山崎農業研究所会員

---

< 旬を食べる一野良からの便り・5 > “トウモロコシ”

---

田舎では「とうみぎ」という。「お湯を沸かしてから畑に採りに行け」といわれるほど鮮度の低下が早い。低温貯蔵で日持ちが良くなったが、採りたてにはかなわない。

とうみぎは、煮ても焼いても蒸しても良いが、最近生で食べられる「フルーツコーン」が出始めた。「フルーツ感覚で生のまま、ミルクのような甘さとしゃきしゃきとした歯ざわり」が売りである。ヤングコーンもやっと馴染んできたが、最初はこんな小さなうちにと可哀想で箸がつかなかった。

生で食べるで思い出すことがある。終戦直後、甘いものは貴重であった。子

供達の野良遊びの中で、甘いものを見つけては口に入れた。とうぎみの茎もその1つ。鎌で節を除き、口で皮を剥く。うまくやらないと竹のような皮で唇を切った。ちょうど、さとうきびのように芯をしゃぶった。根元の若い根にも甘いものがあった。割り箸の太さで2-3cm、薄みどりで先端がかすかなピンク色をしていた。ひもじいから口にしたというより、遊びそのものであった。

炎天下のトウモロコシ畑、実り具合を見るため、そっと皮を破り中を見る。ふっくらとした粒々がまっすつぐに並ぶ。よしOK、毛のある先端を持ち、力いっぱいバッサともぎ取る。トマトもキュウリも痛めないように優しく収穫するが、とうみぎの収穫は子供心に爽快だった。

この子供の頃から慣れ親しんだトウモロコシに異変が起きつつある。遺伝子組換えトウモロコシの増加である。すでにアメリカではトウモロコシ栽培面積の約半分は、この遺伝子組換え品種になっている。トウモロコシの最大輸入国である日本にとって対岸の火事というわけにはいかない。

平成16年6月、厚生労働省食品安全部は「安全性審査の手続きを経た遺伝子組換え食品」に、Btスイートコーン加えた。Btコーンとは、Bt菌という殺虫細菌の遺伝子を組み込んだ遺伝子組換えトウモロコシである。飼料や油ではなく、直接、口に入るBtスイートコーンが、わが国でも輸入・販売が可能となったのだ。

小泉 浩郎  
山崎農業研究所事務局長  
y.noken@taiyo-c.co.jp

---

<山崎農業研究所情報>

---

◇山崎記念農業賞・記念フォーラム（2004年7月3日）講演要旨（速報）

—国民の森林づくり：その目的と技法を問う—

【その1】国民の森林づくり—現状と課題—

山本 千秋氏（東京林業研究会代表）

日本の森林・林業の現状とあるべき方向について話す。1997年（平9）から2001年（平13）にかけて林業政策は行きづまった。2001年（平13）に森林・林

業基本法が出たが原型は1964年（昭39）のものである。しかその内容は地球サミットからおおきく変わってきた。

（1）森林資源の現状：天然林の森林蓄積は不変であるのに対し人工林の蓄積は増大しつつある。2500万ha森林面積のうち天然林と人工林の比率（%）は約60：40であるが、1999年（平11）の統計では森林蓄積は、43：57と逆転している。森林の機能3区分には「水土保全林」、「森林と人との共生林」および「資源循環利用林」があるが、それらの面積比率は66：13：21となっている。今後もこのような基準で行くことになっている。

（2）森林経営：人工造林の面積は減少している。これは林業衰退を意味している。間伐の必要な人工林の面積は80%にも及んでいる。保有山林面積では1～5haが7～8割を占めている。スギ山元立木価格は低迷し1999年（平11）比で1980年（昭55）の3分の1になった。これにもかかわらず伐出業賃金、苗木代は約5割も上昇した。スギ1立方メートルで雇える伐木作業人は1961年（昭36）には11.8人であったが、2002年（平14）では0.4人である。これでは経営は成り立たない。

（3）立木育成、丸太生産流通、木材加工流通における付加価値：加工による上昇が目立っている。1立米につき立木育成に7000円、丸太生産流通に8600円、木材加工流通では13300円。生産者へのしわ寄せが目立つ。

（4）林家の間伐および伐採跡地への植林の実施状況：山林保有規模区分0.1～20haでは21%が植林、77%が未植林の状態である。20～100haでは62%が植林されているのみである。100ha以上でも65%の植林状況にある。間伐実施したところは上記の規模区分でそれぞれ38%、65%、76%にすぎない。

（5）木材（用材）の供給構造(2002年)：木材（用材）供給量8813立米(100%)のうち国産材はわずか18.2%である。カナダ12.6%、米国10%、オーストラリア10%、ロシア7.8%、マレーシア6.5%、インドネシア6.6%などである。木材供給量は国産材は減少している。輸入については丸太は減少し、加工品は増大しつつあり国内加工業者を圧迫している。

（6）新設住宅着工戸数の推移：木造建築は減少し、非木造建築が増大している。わが国の木材利用は1989年（平元）には1億立米を越えたが、その後、低

下気味である。

(7) 国有林野事業の借入金、債務残高推移：展望は開けていない。自己収入は減少、借入金は増大している。1995（平7）では自己収入1.8（千億円）借入金3（千億円）一般会計受入0.6（千億円）であり債務残高3.33（兆円）である。

(8) 伐採量、成長量の推移：伐採量と生長量がクロスする点が1953（昭53）にある。人工森林蓄積の増加が始まる。

(9) このような多くの難問に、どのような解決が考えられるか：森林の価値を公益機能の点からみると年に75兆円の価値を生み出している。これは国家予算に匹敵する。狭義の林業の視点からみたばあい、現在は、投資すれば、年当たり1.5%の損失となる。しかし公共的な投資効果として、それだけの公益機能の価値があるものとして理解する必要がある。森林のもつ価値の再認識が求められている。

（文責：安富・田口）

---

<79歳の意見>戦争をしない平和の声はふだんから

---

こんどの参議院選挙の争点の一つは戦争への道か否かであったが、憲法の改正公約は出ているものの選挙の票にはなりきれなかった。

137号の<読者の声>長谷川さんの93歳のお母さんは「太平洋戦争の前にそっくりになってきた」と心配している。「あの戦争の前もおかしいと思っていたけど、気がついたら何も言えなくなっていた」という。

私の住んでいる西東京市では、戦争はもう嫌だということにつながる色々な市民の学習・集会在催されている。

「太平洋戦争の歴史に学ぶ」（3回）「戦争を体験した世代から平和へのメッセージ」（3回）「平和のための戦争展」小森陽一氏の「岐路に立つ憲法」、アニメ「うしろの正面だあれ」などがある。

4月には「守ろう平和憲法・西東京の会」が結成された。そして8月15日には「被爆者のお話をきくつどい」（ながさき・ヒロシマの映画と作家の話）が決まっている。



私も「守ろう平和憲法の会」に入会した。憲法改悪反対の一点で合意し共同出運動しましょうということに賛成した。ふだんからの声が必要であろう。

残念なのは20〜30歳代の人たちの参加が少ないことだ。いまのままでは、やがて兵役義務が現実になり、国際貢献のため海外派遣が常態になりそうだが、そうならなければ若者は戦争や政治に無関心なのかと心配になる。

選挙が終わっても、自民党は2005年に新憲法草案を策定。自衛隊の位置づけと国際貢献における役割、集団的自衛権などについて明確にするという。民主党や公明党も改憲に熱心だ。憲法問題はこれからが正念場だ。

私たち戦争体験者も、若者や主婦層までに伝えられる分かりやすいインターネットの利用をさらに大きくしなければと呼びかけている。

原田 勉

山崎農業研究所会員・『電子耕』編集同人

<http://nazuna.com/tom/>

---

<日本たまご事情>松本楼のオムレツライス

---

東京日比谷公園の松本楼は数奇な歴史をもっている、まずその場所は洋式公園第一号の日比谷公園のど真ん中に明治時代後半、公園建設と同時に建てられた。明治、大正、昭和にわたって、公園と松本楼はなにかあると政治の表舞台となってきた。

そう言えば、まだ血気盛んな学生の頃、ここの広場に集結して国会議事堂へデモをかけた事がある。それから十数年後の確か沖縄デーのとき、この松本楼は暴徒化したデモ隊に放火され全焼したと聞いている。

現在の建物は再建されたものだが、なにしろこの公園に足を踏み入れるのは、学生時代以来であるのでなんとも懐かしい。それものんびり松本楼のオムレツライスを食べに行けるとは有難い。

天気が良かったので、念願のオムレツライスを屋外のガーデンテラスで食べていた。すると目の前にある大銀杏の樹の陰から出てきた雀が、私のテーブルにチョコッと座り、しきりとオムレツライスを催促する。

これには少々驚いたが、少しお裾分けをすると今度は仲間がもっと増えてきた。面白いことに、雀たちはオムレツライスの卵の部分から先に食べる、嬉しいじゃないか、卵の美味しいことを知っているらしい。

昼のお客たちの食べているものを見ると、やはりオムレツライス、ハヤシライス、カレーライスが多い、それを目当てにやってくる常連さんでその日も賑わっていた。ケチャップライスにオムレツを乗せるタイプで、ソースはいろいろと選べる、私はマッシュルームとビーフのソースを頼んだ。@1000円也は味と場所の雰囲気を考えるとお値打ちである。

齋藤 富士雄

(株)愛鶏園

<http://www.ikn.co.jp/>

---

<編集後記・同人の近況報告> (7月1日～7月14日)

---

7月3日、新宿四谷の太陽コンサルタンツで開かれた第29回山崎記念農業賞贈呈式・記念フォーラムは盛会だった。表彰された鋸谷茂さん(福井県林業指導員)の開発した間伐・育林法の話を目撃してみたいと足を運ばれた会員外の参加も多かったようだ。鋸谷さんは自分の技術は当たり前の・既存の理論を組み合わせただけだという。しかし、自分のように、体系的に間伐・育林技術を組み立てた研究者はこれまでいなかった、とも。桐谷圭治著『「ただの虫」を無視しない農業』(築地書館)のなかに「基礎的な技術がもっとも応用的である」との言葉がある。“自然の摂理”を見据えた鋸谷さんの間伐・育林法は、まさに、基礎的であるとともに応用的な技術であるといえるだろう。

(山崎農業研究所会員・田口 均)

---

◎お願い「<読者の声>の投稿規定・メールの書き方」

---

- 1、件名(見出し)を必ず書いて下さい。「はじめまして」は省略して、言いたいことを具体的に。
- 2、氏名・ハンドルネームは、文末ではなく始めのほうに。
- 3、1回1テーマ、10行位に。

4、ホームページを持っている人は、文末に URL を。

5、JIS X0208 規格外の文字（機種依存文字）のチェックを。

<http://www.chem.sci.osaka-u.ac.jp/networks/check/jisx0208.html>

インターネットで使えない丸数字や半角カタカナ、括弧入り略号などは文字化けの原因です。

---

◎投稿アドレス変更のお知らせ

---

電子耕への投稿アドレスは、発行人の変更に伴い、

[y.noken@taiyo-c.co.jp](mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp)

となっております。投稿される方はこちらのアドレスをお願いします。

次回 139 号の締め切りは 7 月 26 日、発行は 7 月 29 日の予定です。

最後まで読んで頂き有り難うございました。今後もよろしくお願い致します。

---

★『メールマガジンの楽しみ方』発売中

---

書名：岩波アクティブ新書 45 『メールマガジンの楽しみ方』

著者：原田 勉 定価：735 円 発行日：2002 年 10 月 4 日

発行所：岩波書店 ISBN4-00-700045-X

まえがき・目次・著者紹介・注文方法はこちら

<http://nazuna.com/tom/book.html>

---

『電子耕』から大切なお知らせ

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag.html)

<本誌記事の無断転載を禁じます>

\*\*\*\*\*

隔週刊「農業文化マガジン『電子耕』」 第 138 号

バックナンバー・購読申し込み／解除案内

<http://nazuna.com/tom/denshico.html>

[http://www.taiyo-c.co.jp/public\\_html/yamazaki/yama\\_mailmag2.html](http://www.taiyo-c.co.jp/public_html/yamazaki/yama_mailmag2.html)

2004.07.15（木）発行 山崎農業研究所&編集同人

<mailto:y.noken@taiyo-c.co.jp>

\*\*\*\*\* ここまで『電子耕』\*\*\*\*\*